

農業技術情報

令和6年6月13日

ゆとりみらい21推進協議会指導部会

十勝普及センター十勝東部支所 015-572-3128
JA幕別町 0155-54-4118
JA札内 56-2131
JA帯広大正 64-4591
日甜幕別原料事務所 54-2756
幕別町農林課 54-6605

★各作物の生育・作業の遅速（幕別町：6月15日現在）（ ）内は平年値

| 作物名 | 遅速日数 | 生育および作業状況 | 生育期節 |
|------------------|------|--|--|
| 秋まき小麦 | 早4 | 草丈 84.3(77.6)cm 茎数 638(693)本/m ² | 出穂始 5/26(6/1) 出穂期 5/29(6/3) 出穂揃 5/31(6/5) |
| 春まき小麦 (はるきらり) | 遅1 | 草丈 60.9(64.7)cm 茎数 546(804)本/m ² | 止葉期 6/2(6/5) 出穂始 6/13(6/12) 出穂期 6/16(6/15) |
| 馬鈴しょ | ±0 | 茎長 15.9(20.2)cm 茎数 3.4(3.7)本 | 着蕾期 6/12(6/12) |
| 大豆 | 遅1 | 茎長 6.9(9.7)cm 葉数 0.6(1.4)枚 | 出芽期 5/26(5/27) |
| 小豆 | 遅2 | 茎長 2.1(3.6)cm 葉数 0.4(0.6)枚 | 出芽始 5/30(5/31) 出芽期 6/1(6/2) |
| 菜豆(金時) | 遅1 | 茎長 4.4(6.8)cm 葉数 0.3(0.6)枚 は種終 6/5(6/4) | 出芽始 6/6(6/6) 出芽期 6/9(6/8) |
| てん菜(移植) | 早4 | 草丈 26.5(32.3)cm 葉数 16.5(15.1)枚 | |
| てん菜(直播) | 早3 | 草丈 13.8(15.8)cm 葉数 11.2(9.6)枚 | |
| 牧草 | ±0 | 草丈 104.0(99.9)cm 1番収穫始 6/10(6/10) | 出穂始 6/6(6/6) 出穂期 6/12(6/12) |
| 飼料用とうもろこし | ±0 | 草丈 30.3(36.5)cm 葉数 6.9(6.9)枚 | |
| ながいも(マルチ) | 遅2 | | 萌芽期 6/11(6/9) |
| たまねぎ | 遅2 | 草丈 25.3cm(33.9)cm 生葉数 5.5(5.6)枚 葉鞘径 8.9(10.2)mm | |

畑作

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

< 麦類 >

1 赤かび病の防除

秋まき小麦では場内の生育が早い部分に合わせて1回目の防除を実施した場合は、生育が遅い部分や、既に使用した薬剤の使用回数等を考慮し、2回目以降の防除を実施してください。

臨機で4回目の防除(チルト乳剤)が必要になることが予想される場合、耐性菌の産生を防ぐため3回目の薬剤は別系統の「プライア水和剤」等を選択します。

春まき小麦(はるきらり)の出穂始は作況ほ場で6/13頃と平年並になっています。出穂揃が

1回目の防除時期となっていますので、表1を参考に適切な防除に努めてください。

表1 赤かび病の防除薬剤例

| 防除時期 | | | 農薬名 | RAC コード※ | 使用 濃度 (倍) | 使用時期 | 回数 (以内) |
|------------|-----|----------------|------------------------------|------------------|------------------|------------------------------|--------------|
| 春小麦 | 1回目 | 開花始 | プロラインフロアブル | 3 | 2,000 | 収穫7日前 まで | 2回 |
| 春小麦 秋小麦 | 2回目 | 1回目の 7日後 | ミラビスフロアブル | 7 | 1,500 | 収穫7日前 まで | 2回 |
| | 3回目 | 2回目の 7~10日後 | バラライカ水和剤※1 または プライア水和剤 | M4・3 10・1 | 500 1,000 | 収穫14日前 まで 収穫21日前 まで | 2回 2回 |
| | 臨機 | | チルト乳剤25 | 3 | 1,000~ 2,000 | 収穫3日前 まで | 3回 |

※1 バラライカ水和剤は、硝酸カルシウムと混用する際は下記の順で混用下さい。

①バラライカ水和剤 → ②硝酸カルシウム（物理性の問題のため）

※DMI剤(RACコード:3)は、周辺作物に薬害が生じる可能性があるので飛散に注意する。

※農薬の耐性・抵抗性の発達を防ぐため、作用点や作用機構から各農薬の有効成分を分類したものが「RACコード」です。「RACコード」が同じであれば、有効成分が異なっても同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

※「プライア水和剤」は収穫21日前までなので、特に使用時期には注意しましょう(例:7月20日収穫なら6月29日まで)。

2 赤さび病の防除

一部で赤さび病の多発ほ場がみられています。ほ場を確認して、発生が確認された場合は臨機防除で対応しましょう。

表2 赤さび病の防除薬剤例

| 薬剤名 | RACコード | 使用濃度(倍) | 使用時期 | 回数(以内) |
|------------|--------|-------------|-------|--------|
| ミリオネアフロアブル | 7 | 4,000~8,000 | 収穫7日前 | 2回 |

※ミリオネアフロアブルを使用した場合、ミラビスフロアブルは同一系統の薬剤となり、連用となるので注意しましょう。

※発生が多くみられる場合、4,000倍で散布してください。

3 アブラムシ類の防除

町内で寄生が確認されています。ほ場を十分に確認して、薬剤防除の要否を検討しましょう。

【要防除水準】

出穂10日後頃、ほ場のおよそ半分以上の穂で寄生が観察された場合に防除する。(薬剤は6/4付技術情報参照)。

表3 アブラムシ類防除例

| 害虫名 | 農薬名 | RAC コード | 使用濃度 (倍) | 使用時期 | 回数 (以内) |
|--------|------------|------------|-------------|----------|------------|
| アブラムシ類 | ゲットアウト WDG | 3A | 4,000 | 収穫 21 日前 | 3回 |
| | ウララ DF | 29 | 4,000 | 収穫7日前 | 2回 |

※「ゲットアウト WDG」は収穫21日前までなので、特に使用時期には注意しましょう(例: 7月20日収穫なら6月29日まで)。

4 葉面散布による窒素追肥について

適正タンパク値の確保や粒重の増加を目的として窒素の葉面散布を行う場合、「尿素使用の場合は1.0~1.5%液を3回(窒素成分で1回 0.5~0.7kg/10a)」で検討してください。

5 亜リン酸液肥との同時防除で穂発芽の防止を

春まき小麦の両品種は穂発芽耐性が低いのが難点であり、収穫前の降雨で品質が大きく左右されます。下記に紹介されるような亜リン酸液肥は、開花期以降 3~4 回散布することで穂発芽の発生を抑える効果があります。その他にも粒重の増加や耐病性の強化が期待できますので、赤かび病防除と併せて散布を検討しましょう。

表4 亜リン酸液肥使用例

| 商品名 | 使用時期 | 使用倍率 | 備考 |
|-------|-----------------------|------|-----------------|
| サンカラー | 開花期以降から7~10 日間隔で3~4 回 | 400倍 | 赤かび病防除薬剤との混用が可能 |

6 小麦「なまぐさ黒穂病」への注意

十勝では発生が確認されていませんが、注意が必要です。「なまぐさ黒穂病」に汚染された収穫物が乾燥貯蔵施設に混入した場合、施設全体が汚染されることとなり出荷不能になるなど、大きな被害をもたらします。感染している場合、乳熟期までには外観から症状が確認できるようになりますので、下記を参考に、万が一疑わしい株を発見したら、JAあるいは普及センターにお知らせください。

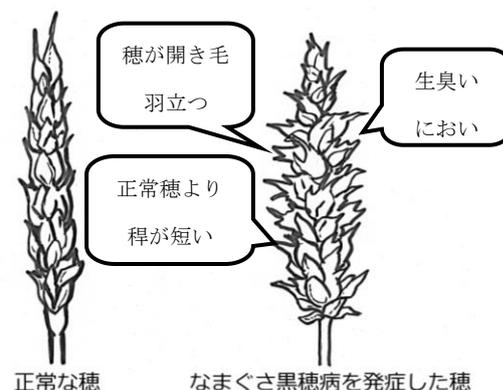


図1 なまぐさ黒穂病の特徴

< てんさい >

1 根腐病の防除<<6月中旬~7月上旬までを目途に>>

「連作・短期輪作ほ場」及び「前回作付時に根腐病が多発したほ場」、「排水性の劣るほ場」では、必ず防除を実施してください。上記の条件で、曇天によりほ場の湿潤状態が続く場合は、2回目の根腐病防除を検討しましょう。

表5 根腐病の防除薬剤例(株元散布)

| 回目 | 薬剤名 | RAC コード | 使用濃度 (倍) | 使用時期 | 回数 (以内) | 水量 (L/10a) |
|----|--------------|------------|-------------|--------|------------|-------------------|
| 1 | ミリオネアフロアブル | 7 | 4,000 | 収穫7日前 | 4回 | 100 |
| 2 | アミスター20フロアブル | 11 | 1,500 | 収穫14日前 | 3回 | 200 |

2 アブラムシ類・ヨトウガおよび褐斑病との同時防除

今年は春以降の気温が高いためアブラムシ類の発生が早く、褐斑病も既に十勝農試で初発が確認されました(11日)。これらとヨトウ類も同時に防除するため、下記薬剤で実施をお願いします。期間は日甜ハガキを参照してください(6月下旬頃)。

表6 アブラムシ・ヨトウガ・褐斑病の防除薬剤例

| 防除時期 | 病害虫 | 農薬名 | RAC コード | 使用濃度 (倍) | 使用時期 (収穫前) | 回数 (以内) |
|----------------|-------|-------------------------------------|------------|-------------|---------------|------------|
| 6月 25日 頃 | アブラムシ | ビレスコ顆粒水和剤 | 4C | 10,000 | 7日 | 3回 |
| | ヨトウガ | ゲットアウトWDG | 3A | 3,000 | 14日 | 4回 |
| | 褐斑病 | グリーンダイセンM水和剤 または グリーンペンコセブ水和剤 | M3 | 500 | 21日 | 5回 |

3 中耕

- (1) 土壌の膨軟化と地温の上昇及び透水性の改善と畦間の除草のため、「カルチ」・「畦間サブソイラ」などを早期に施工し、初期生育の促進に努めましょう。
- (2) 中耕作業の深さと広さは根の広がりを確認し、生育初期には浅めに調整し、次第に狭く深くして畦間が茎葉で覆われる時期(草丈35cmくらい)までに実施しましょう。
- (3) 中耕時、株元まで土を寄せると根腐病の発生を助長するので注意しましょう。

4 除草剤散布

- (1) 除草剤のポイントは適期処理にあります。気象条件や土壌水分等を考慮し、実施しましょう。
- (2) 直播てん菜は移植栽培と登録基準が異なるので注意しましょう。

※日甜ハガキ情報や「農作物病害虫防除基準・除草剤使用基準」を参照して適切な防除を実施してください。

< ばれいしょ >

1 疫病の防除

ばれいしょ疫病菌は10℃を超えると活動が始まり、最適気温18～20℃の多湿条件で多発します。特に、冷涼多湿な環境や水たまりのできやすい凹地(排水不良箇所)、トラクタの車輪の

ぬかるんだところ(防除畦など)、生育が過繁茂気味のほ場や風通しの悪いところ・山あい・防風林の影などでは発生しやすく注意が必要です。

- (1) 初発前に必ず防除: ほ場をよく観察し、基本は予防防除に努めてください。
- (2) 初回の防除前に感染が疑われる場合: 治療効果のある薬剤を使用。
- (3) 作物の生育に応じた薬剤選択: 茎葉の生長段階では浸透移行性のある薬剤を使用。
- (4) 降雨に応じた薬剤選択: ほ場に入れない状況が予想される場合は、Wインターバル(14日間隔)効果のある薬剤※の使用を検討してください。

※【Wインターバル対応薬剤例】

「リライアブルフロアブル 800 倍」、「プロポーズ顆粒水和剤 750 倍」、「ライメイフロアブル 2,000 倍」、「レーバスフロアブル 1,500 倍」、「ランマンフロアブル 1,000 倍」、「フロンサイド SC 1,500 倍」(平成 25 年度指導参考)。

表7 疫病の防除薬剤例

| 農薬名 | RAC コード | 使用倍率(倍) | 使用時期 (収穫前) | 使用回数 (以内) | 効果の 発現 |
|-----------------|------------|-------------|---------------|--------------|-----------|
| グリーンダイセン M 水和剤 | M3 | 400~600 | 7 日 | 10 回 | 予防 |
| リライアブルフロアブル | 43、28 | 800~1,000 | 7 日 | 3 回 | 予防・治療 |
| ゾーベックエンカンティア SE | 49、11 | 2,000 | 14 日 | 3 回 | 予防・治療 |
| フロンサイド SC | 29 | 1,000~2,000 | 7 日 | 4 回 | 予防 |
| プロポーズ顆粒水和剤 | 40、M5 | 750~1,000 | 7 日 | 5 回 | 予防・治療 |

※「フロンサイドSC」は 1,000 倍で菌核病、2,000 倍で夏疫病に登録あり。花の落ちる時期に合わせて検討する。

※「プロポーズ顆粒水和剤」は夏疫病に登録あり。

2 軟腐病の防除

軟腐病は高温多湿条件で多発しますが、本格的な軟腐病防除は、開花期以降(7月上中旬)となります。そのため、早い時期の疫病防除に併せて実施する必要はありません。ただし、強風や培土作業等で茎葉が傷ついた場合は、傷口からの感染を防ぐため防除を行いましょ。初期防除を心がけ、生育量に応じて散布水量を調節しましょう。

表8 軟腐病の防除薬剤例

| 農薬名 | RAC コード | 使用濃度 (倍) | 使用時期 (収穫前) | 回数 (以内) | 効果の 発現 |
|------------------------|------------|-------------|---------------|------------|-----------|
| スターナ水和剤 | 31※1 | 1,000 | 7 日 | 5 回 | 予防・治療 |
| バクテサイド水和剤 | 41,25※2,M1 | 750~1,000 | 7 日 | 5 回 | 予防・治療 |
| マテリーナ水和剤 | 31※1,25※2 | 1,000 | 7 日 | 3 回 | 予防・治療 |
| カスミンホルダー 銅ペーパーシン水和剤 | 24,M1 | 500~800 | 7 日 | 3 回 | 予防・治療 |
| マスタピース水和剤 | 生物農薬 | 1,000 | 前日 | — | 予防 |

※1 オキシリニック酸(RAC コード31)に対する低感受性菌が出現している地域があるので、連用は避ける。また、オキシリニック酸(RAC コード31)を含む剤の使用は合計5回までとする。

※2 ストレプトマイシン(RAC コード25)を含む剤の使用は合計 5 回までとする。

3 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除

本年はアブラムシの発生期が「早」、発生量は「多」と予想されています(北海道病害虫防除所「6月予報」)。林地や防風林近くの多発に注意し、ほ場をよく観察し、害虫の発生状況に応じて防除を実施してください。

表9 アブラムシ類・オオニジュウヤホシテントウ・ナストビハムシの防除薬剤例

| 農薬名 | RACコード | 対象害虫 | | | 使用濃度(倍) | 使用時期(収穫前) | 使用回数(以内) |
|-------------|--------|---|---------------|-------------|----------------------|-----------|----------|
| | | アブラムシ類 | オオニジュウヤホシテントウ | ナストビハムシ | | | |
| モスピラン SL 液剤 | 4A | ◎(ワタ) | ◎ | ◎ | 4,000 | 7日 | 3回 |
| アドマイヤー顆粒水和剤 | 4A | ◎ (ジャガ/モモ/ワタ) | ◎ 15,000倍 | | 5,000 ~ 15,000 | 14日 | 2回 |
| アクタラ顆粒水和剤 | 4A | ◎3,000倍 (ジャガ/ワタ) | ○ 2,000倍 | ◎2,000倍 | 左記参照 | 14日 | 3回 |
| ベジホン乳剤 | 1B、3A | ◎ (ジャガ 1,000/ ワタ 2,000倍) | | ◎1,000倍 | 左記参照 | 30日 | 2回 |
| ペイオフ ME 液剤 | 3A | ◎ (ジャガ 2,000/ ワタ 1,000倍) | ◎ 2,000倍 | ○ | 1,000 ~ 2,000 | 7日 | 4回 |
| ゲットアウト WDG | 3A | ◎ (ジャガ 2,000倍/ モモ 3,000倍) | | ◎ 3,000倍 | 2,000 ~ 3,000 | 7日 | 4回 |
| マブリック EW | 3A | ◎(ジャガ) | | | 4,000 | 7日 | 2回 |
| モベントフロアブル | 23 | ◎(ワタ) | | | 4,000 | 7日 | 3回 |
| ウララ DF | 29 | ◎ (ジャガ/モモ/ワタ) | | | 4,000 | 7日 | 2回 |
| コルト顆粒水和剤 | 9B | ◎ (ジャガ 4,000・6,000/ モモ・ワタ 4,000倍) | | | 4,000 ~ 6,000 | 前日 | 3回 |

※ジャガ:ジャガイモヒゲナガアブラムシ、モモ:モモアカアブラムシ、ワタ:ワタアブラムシ

※◎は登録があり、道ガイドに掲載されているもの、○は登録があるもの(以下、同じ)

※モベントフロアブルは銅ストマイ水和剤とは混用しない(ストレーナに付着物が生じる)。また、ストレプトマイシン含有殺菌剤との混用の場合は、モベントフロアブルを先に希釈する。

<豆類>

1 中耕

初期生育を確保するために、除草剤の残効を考慮しながら、暖かい日に中耕を実施し地温の上昇を図りましょう。また、遅い中耕や培土は、断根による養分吸収阻害の程度が大きくなるので、開花始 10 日前まで(7 月上中旬頃)には最終の培土を終えましょう。

2 大豆「わい化病」・金時「黄化病」(ジャガイモヒゲナガアブラムシ)の防除

病害虫発生予察情報によると、ジャガイモヒゲナガアブラムシの発生期は「早」・発生量は「多」と、飛来時期は早い予測となっております。以下の通り防除を実施して下さい。

表 10 大豆「わい化病」・菜豆「黄化病」の防除例

| 病害名 | 薬剤名 | 使用濃度 | 使用時期(収穫前) | 回数(以内) |
|---------------------|----------|---------|-----------|--------|
| 大豆「わい化病」 菜豆「黄化病」 | ペイオフME液剤 | 2,000 倍 | 7 日 | 3 回 |

防除時期: クルーザーを使用していない場合…出芽揃～初生葉展開期に1回目、6月中下旬に2回目
 クルーザーを使用した場合…6月中下旬(は種後1ヶ月程度をめぐり)の1回

3 小豆「茎疫病」の防除

連作ほ場や排水の劣る場所で発生することがあります。発病後の茎葉散布では効果が得られないため、発生が予想されるほ場は、予防防除や溝切りによる排水を実施してください。

表 11 小豆「茎疫病」の防除薬剤例

| 農薬名 | RAC コード | 使用倍率(倍) | 使用時期(収穫前) | 使用回数(以内) |
|------------|---------|-----------------|-----------|----------|
| ランマンフロアブル | 21 | 1,000 | 7 日 | 3 回 |
| レーバスフロアブル | 40 | 1,500～ 2,000 | 7 日 | 3 回 |
| リドミルゴールドMZ | M3, 4 | 500 | 30 日 | 3 回 |

4 小豆チョウ・ガ類、アブラムシ類の防除

マメアブラムシは局所的に多発生するので、ほ場をよく観察し寄生が目立ったら早急に防除してください。

表 12 小豆チョウ・ガ類、アブラムシ類の防除薬剤例

| 対象害虫 | 農薬名 | RAC コード | 使用倍率(倍) | 使用時期(収穫前) | 使用回数(以内) |
|-------------------|-----------|---------|-------------|-----------|----------|
| ツメクサガ | トクチオン乳剤 | 1B | 1,000 | 30 日 | 2 回 |
| アブラムシ類 | モスピランSL液剤 | 4A | 2,000～4,000 | 14 日 | 3 回 |
| | ウララDF | 29 | 4,000 | 7 日 | 2 回 |
| アブラムシ類 アズキノメイガ | スミチオン乳剤 | 1B | 1,000 | 21 日 | 4 回 |
| | オルトラン水和剤 | 1B | 1,000 | 14 日 | 3 回 |

5 菜豆(金時)「かさ枯病」の防除

かさ枯病に罹病すると本葉に赤褐色の斑点が生じ、周辺部が黄色くなり葉脈はすじ状に赤褐色を呈し激しい場合は株が黄変し枯死します。本病は低温多湿で発生しやすく、機械管理作業の接触でまん延します。発生が予想される場合は 6/4 号を参照し防除して下さい。

6 菜豆の「根腐病」発生時の対策

発芽後数週間で感染が起こり、6月中～下旬に降雨と高温が続くことで発病が激しくなります。発病株を発見したら、健全部の新根の発生を促すため、早期に培土しましょう。

野菜

薬剤使用にあたっては、各部会や販売先等の基準に従ってください。

薬量および倍率は基準内に抑え、薬害やドリフトには十分注意してください。

<ながいも>

(1) トレンチャー耕の陥没対策

集中豪雨に伴う栽培畦の陥没を未然に防ぐため、培土により畦間からの雨水の浸入を抑制しましょう。

ほ場外周や雨水が流れ込みやすい場所には溝を掘り雨水流入を防ぎましょう。

トレンチャー溝の陥没が発生した場合は、早期に埋め戻しを行ってください。

(2) 中耕

6月下旬頃から根が畦間に伸び始めます。遅くなると根を切る可能性があるため、7月上旬までに中耕を終わらせましょう。

(3) アブラムシの防除

アブラムシはウイルス病を媒介します。特に種子ほ場では、アブラムシの発生が確認された際は防除を実施してください。

表6 アブラムシの防除薬剤例

| 薬剤名 | RACコード | 使用濃度(倍) | 使用時期 | 使用回数 |
|------------|--------|---------|------|------|
| モスピラン顆粒水溶剤 | 4A | 4,000 | 7日前 | 3回以内 |
| ゲットアウトWDG | 3A | 3,000 | 前日 | 3回以内 |
| コルト顆粒水和剤 | 9B | 4,000 | 前日 | 3回以内 |

(4) 除草剤の生育期処理

・畦間土壌処理は、茎葉(下葉)に飛散しないように行ってください。

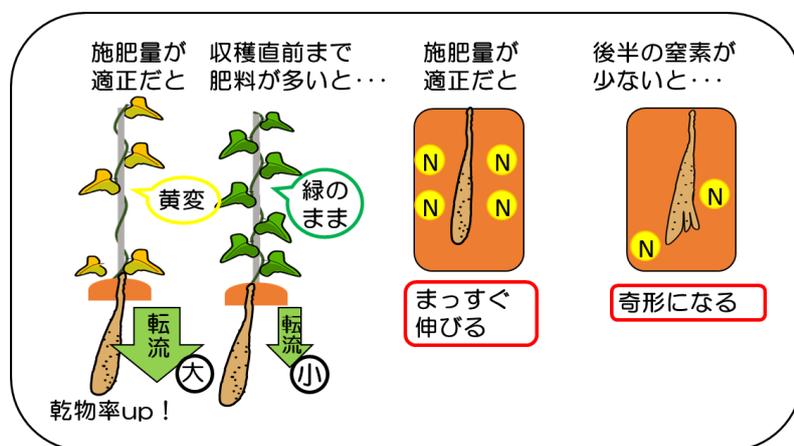
(5) 分肥の施用時期

・分肥を行う場合は、7月中旬までに実施してください。

・とかち太郎は従来品種(音更選抜)

よりも後半の生育が旺盛です。緩効性肥料を使用していない場合は、安定栽培のために分肥を実施してください。

・過剰な分肥や多肥ほ場における分肥は、黄変期の遅れによる乾物率低下の原因になります。分肥する際は基肥量も確認し、適正範囲内で実施してください。



～ ～ 農薬の安全使用と農作業安全に努めよう！！ ～ ～

□ 農薬危害防止活動の実施

- ★農薬の使用基準や注意事項を確認し遵守しましょう。
- ★除草剤等の散布でスプレーヤを使用する際には周辺作物への飛散防止に努めましょう。
- ★農薬は必ず保管庫にしまい、カギをかけましょう。
- ★使用した農薬容器や袋は、適切に処理しましょう。
- ★農薬散布の際は、マスク、防除衣、ゴム手袋、帽子、防除用メガネ、長靴、肌を覆うタオルを身につけ、しっかり安全対策をとりましょう。

□ 春の農作業安全運動強調月間（４～６月）

「焦り」や長時間作業の疲れによる「不注意」などに伴う農作業事故の発生が懸念されます。

- ★機械の調整・整備等の際は、必ずエンジンを止めましょう。
- ★必ず機械を止めてから乗り降りしましょう（飛び乗り、飛び降りはしない）。
 - ★二人以上で作業する時や危険と思われる作業に入る前には、必ず声を掛け合しましょう。

土壌診断を活用しましょう

土壌診断を実施し、適切な肥料選定をすることで、養分バランスの適正化とコスト節減に活用しましょう。

特にリン酸・カリの蓄積が進んでいるほ場が多い傾向にありますので、土壌診断に基づき、適切な施肥設計を行いましょう。

※生育期間中でも、畝間から土壌サンプルの採取は可能です。